

# mediopos 7

2015.4.15 ~ 2015.5.9

【神秘学ポエジー～風遊戯 第19集】

media-photo-poesie ヴァージョン

神秘学遊戯団

# mediopos-151

2015.4.15



■福音館書店編集部（編）・石川勇（絵）『なぞなぞの本』（福音館書店 1982.9）

「いつのことともわからない遠い昔から、なぞなぞがありました。だれと指さすことのできないたくさんの人たちが、なぞなぞを遊び、伝え、つくってきました。この日本でも、氷にとぎされた北の国でも、太陽がしっかりと照りつける南の国でも、風のふきわたる草原でも、万年雪を頂く峰々にかこまれた山里でも、人々はなぞなぞをします。／そして、いまこのときにも、口調のよいことばにのせて問われるなぞなぞに耳をすまし、みんなが知っているはずのひとつの答えをもとめて、おとなも子どもも、考え、思いだそうとしているかもしれません。遠くを見るような目をして……。」

なぞが  
歌のように  
ミステリーのように  
なぞなぞになる

おんなじ話を  
なんどもなんども  
せがむ子どものように  
知っている答えを聞きたいのか

知っているはずなのに  
どこか遠くへ行ってしまって  
忘れてしまっている答えを  
思い出そうとしているのか

ほんとうのなぞは  
人間というなぞ  
世界というなぞへ向けられ  
忘れちゃいけないよと  
なぞなぞにして問いかけている



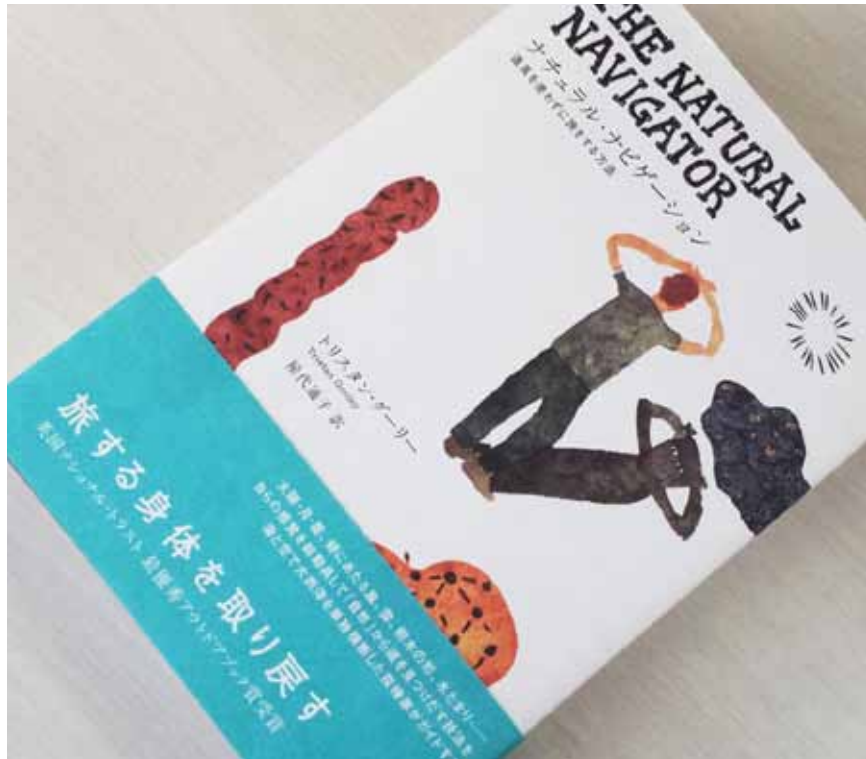
■宮本常一『イザベラ・バードの旅／『日本奥地紀行』を読む』（講談社学術文庫 2014.4）

「アイヌの世界は習俗の上では割合にわれわれに共通するものがあるのですが、気風の上では違ったものがある。イザベラ・バードが行っても皆が物見高く集まるということはなく、無関心である。ところが一方、東京を出て青森の間では、どこへ行ってもわんさんと人がおしかけ彼女を見ている。未開とか進歩とかいうのは、その差ではないだろうかという気がするのです。日本人の中には物見高さとか、おっちょこちょいとか、とかく他の国では見られない現象が起こる。それが習俗的なものなのか、体質的なものなのかはわかりませんが、そのおっちょこちょいの気質が明治以降、外国文化をすごい勢いで吸収する力となっているのではないかと、これを読んで感じたのです。／アイヌは日本の骨董を蓄積はしたのですが、それによって自分たちの生活を啓発するといったことはなく、ただ宝として持っている。これが日本だと、下手でも真似をして自分で作ってみなければ気がすまないと思うのです。そして古いタブーを断ち切っていった日本と、アイヌの文化の差をイザベラ・バードは常に客観的な目でとらえていくことによって、その差と共に共通性も掘り起こされてくるのです。」

なんでも知りたがり  
なんでも真似たがり  
タブーを破る  
物見高いおっちょこちょいが  
創り出すものと破壊するもの

みずからの信じるものを守り  
みずからのやり方を変えず  
禁忌を守る  
誇り高い慎重者が  
受容できずに守り続けるもの

進歩と未開という言葉では  
言い表せないものの彼方にある  
断念という知の極北と  
叡智という信の極北とのあいだに続く  
大いなる道を歩むことはできないものか



教えられた道を歩むことと  
道を見つけながら歩むことの違いが  
わからなくなって久しい

答えを得ることと  
問いを持つことの違いが  
わからなくなって久しい

見ることと  
観ることの違いが  
わからなくなって久しい

生きていることと  
存在することの違いが  
わからなくなって久しい

知ることと  
知らないことを知ること  
道はそこからしか始まらない

■トリストラン・グリー『ナチュラル・ナビゲーション／道具を使わずに旅をする方法』（紀伊國屋書店 2013.12）

「ナチュラル・ナビゲーションは、芸術として扱われたときに最も美しく、力強く輝きを放つ一人間の根源的な能力であつて、単なる歴史のひとつまたとか、サバイバル知識と片付けていいものではない。」

「道を見つけることと「知る」こととは違う。ほんの5分で、一度以内の誤差で正確に方向を定める方法を教えることはできる。それがわかれば、地図やコンパスやGPSの助けを借りずに、簡単な旅をすることができる実際的な知識だ。だがそれだけだ。教わった人は方角はわかるかもしれないが、それでは彼らの旅は、奥行きが乏しいものになってしまう。」

「ナチュラル・ナビゲーションは自然を利用して道を見つける技法だ。道具や機器の助けを借りず、主として、太陽や月、陸地、海、天候、植物や動物といった自然の手がかりだけを頼りに方角を定めるという稀有な技能によってなっている。観察と推論の世界だ。」

# mediopos-154

2015.4.18



陽極まりて陰となり  
陰極まりて陽となり

陽と陰とは戯れつつ  
なべて中へと向かい

わが心も身体もまた  
中へと向い旅をする

生も死も老いも病も  
中へと至る旅路かな

## ■桜沢如一（岡田定三 編集・解説）

『【新編集版】無双原理・易／「マクロビオティック」の原点』（サンマーク出版 2004.6）

「あらゆる対症療法（東西の医学、鍼灸、物理的療法、心理的療法、調息法、運動、自然療法、栄養療法までを含む）の特徴や優越を認めたくえて、それらを縁として、人々を根本世界の原理である陰陽の理解と体得に導くことが、われわれにとって最も望ましい道である。／要するに、陰陽無双原理の個々人における生理的理解の徹底は、食養による健康の確立である。そして、無双原理の生物学的、社会学的な理解の徹底こそが、国家社会、人類の健全と幸福を増進させる道なのである。」

「根本無双原理！／自然法爾！／身土不二！／難きを易きに図り／大を細に為す。／広大にして無限、／易は悉く備う。」

# mediopos-155

2015.4.19



■伊藤亜紗『目が見えない人は世界をどう見ているのか』（光文社新書 2015.4）

「見える人は三次元のを二次元化してとらえ、見えない人は三次元のままとらえている。つまり前者は平面的なイメージとして、後者は空間の中でとらえている。／だとすると、そもそも空間を空間として理解しているのは、見えない人だけなのではないか、という気さえしてきます。見えない人は、厳密な意味で、見える人が見ているような「二次元的なイメージ」を持っていない。でもだからこそ、空間を空間として理解することができるのではないか。／なぜそう思えるかという、視覚を使う限り、「視点」というものが存在するからです。視点、つまり「どこから空間や物を見るか」です。「自分がいる場所」と言ってもいい。」

「要するに、見えない人には「死角」がないのです。これに対して見える人は、見ようとする限り、必ず見えない場所が生まれてしまう。そして見えない死角になっている場所については「たぶんこうなっているだろう」という想像によってしか補足するしかない。」

「表が裏になり裏が表になる。同じことは「外」と「内」に関しても当てはまります。かたや見える人にとって外と内は全く違うものです。外は見える側であり、内は見えない側、隠された側です。しかし見えない人にとっては、こうした違いがそもそも成立しないのです。」

見えることで  
見えないものがつくられる

けれど見えないものの彼方を  
私たちは観なければならぬ

聞こえることで  
聞こえないものがつくられる

けれど聞こえないものの内を  
私たちは聴かなければならぬ

知ることで  
知らないものがつくられる

けれど知らないことを知ることで  
私たちは知を超えてゆかねばならぬ

分かることで  
分からないものがつくられる

けれど分けられないときにはじめて  
私たちはそれそのものになることができる

# mediopos-156

2015.4.20



■ナタリー・サルトゥー＝ラジュ『借りの哲学』（高野優 監訳／小林重裕訳 太田出版 2014.3）

「私たちにできることは――そして、私たちがしなければならないことは、《借り》は《借り》として残したまま、そこに《贈与》の概念を導入し、「等価交換の経済」を社会システムの最上位に置くのではない、別の社会システムをつくることである。それは、目先の利益を超えた社会システムであり、将来の発展を重視して、人と人との関係を守っていくことが大切にされる社会システムである。／そのために重要なことは、まず「私たちは《生まれながらの借り》を背負っていて、自分ひとりでは生まれることもできなかつたし、大きくなることもできなかつた」と知ることである。また、「大きくなったあとも、ひとりでは生きていくことはできない」と知ることである。私たちはつねに他人に依存して生きているのだ。他人に依存するというと、自分をなくしてしまうようだが、そんなことはない。その反対である。人は孤立してしまえば生きていくことはできないし、自分になることもできない。人は他人がいることによって自分を確立し、他人に依存していることを自覚することによって、自分らしく生きることができるようである。／このとき、《貸し》をつくったほうは、「《贈与》の論理」を用いて、その《借り》を免除する。それは《借り》をなくしてしまうことではない。《借り》は《借り》として、「返さなくてもよい」と言うことなのである。／いっぽう《借り》を免除してもらったほうは、それに感謝の気持ちを持たなくてはならない。そうして、その感謝の気持ちをあらたな《贈与》――すなわち、「この《借り》は返さなくてもよい」という《貸し》を誰かに与えることによって示すのである。最初に《借り》を免除してくれたのは、その免除してくれた人の「愛」である。「愛」は「愛」で返さなければならない。だから、最初に《借り》を免除してもらった者は、誰かに《貸し》を与えて、それに対する《借り》を免除することによって、「愛」を返すのである。」

目には目を歯には歯を  
昨今では倍返しの世界

与えたものが返ってくる  
目に目が返ってくる

与えたものが返ってくるならば  
愛を倍返ししてもらえばいいではないか  
しかも相手は自分でなくてもいい

借りたものを返す  
歯に歯を返す

借りたものを返すとしたら  
愛を倍返しすればいいではないか  
しかも相手は借りた相手でなくてもいい

貸し借りの連鎖を愛のように広げ  
倍返しのお返し  
満たしてあげばいいではないか



自然は変容する！  
幾何学図形に似た  
小さな形象のなかに  
天空はみずからを注ぎ込むのだ

かぎりなく大きなものと  
かぎりなく小さなものは  
互いを照らしあい結びあい  
やがてそれが精神の器となる！

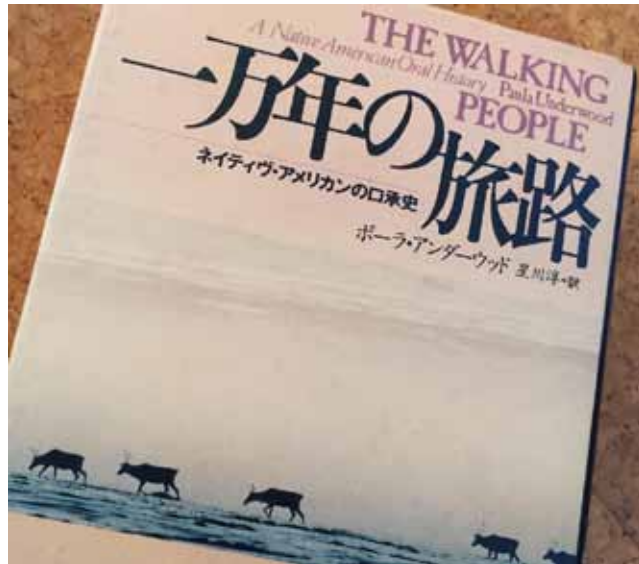
物が進化するのか  
精神が進化するのか  
二元のマーヤが解かれるとき  
宇宙はひとつになる

■エルンスト・ヘッケル『生物の驚異的な形』（河出書房新社 2009.4）

（「オラフ・ブライツバッハ：ヘッケルの詳細な図版を鑑賞するための短い説明」より）

「ヘッケルにとって、図解は存在する知識を叙述するのではなく、自然を理解することそのものであり、自然の真実を見ることである。したがって、本書は単に標本を集めたものではなく、一つ一つの項目が全体を明らかにし、自然それ自体をはっきりと示している。自然の形を明らかにすることによって、自然についての理解は確かなものになるかもしれない、それはヘッケルによれば、経験主義的な方針に従う、自然科学の支流のなかに留められるべきではない。自然について知ること、美そのものが鏡に映った姿にほかならない。それ自体から発展し、それ自体へと進化する美が美しいのである。／この美の姿はどのようにして実体化されるのか？ 自然は知識を獲得するという行為のなかに常に内在しているのか？ この点において、美しいということは単に自然の状態なのか？ ヘッケルの論法は簡単である。すなわち、人間は自然であり、進化の一部であり、その結果である、というものである。われわれの行為と思考は、この進化の産物である。それゆえに、人間が何かについて知るとき、それは究極的には人間自身の本質を明らかにする。われわれの知識——それは自然の法則のなかで育ち、自然の法則に従う——は、それ自体が自然である（ヘッケルによれば、それ以上ではない）。素描家の感覚器官や動的行為は進化の結果であり、結局のところ、それを使って自然が自然を描いているに過ぎない。ヘッケルの世界についての包括的な考え方、一元論への執着——彼はそれについて、『宇宙の謎』のなかで詳細に説いている——は、自然を理解することについての考え方、自然の美についての考え方、そして、そこから導き出された生物学主義に基づいているが、それは一元論そのものに純化されているように見える。本書はまた、この宇宙の見方とも解釈される。／その結果として、本書はヘッケルにとってのさらなる次元を獲得した。スケッチが美であり、美しいという事実、そしてこの美しさが自然の最も小さなもの——たとえば単細胞生物や深海のクラゲ——のなかに見つけられるという事実が、人は最も小さな生物のなかに自らの考えるところの人間を特徴づけるもの、すなわち“精神”を見つけたということを、ヘッケルに示して見せた。これらの極めて小さな生物の美しさが、彼に、最も大きな生活形態の一つ——人類——の本質を明らかにしてくれたのである。ヘッケルは、自然の一部であるということは、進化の過程の要因か、あるいは進化の過程の結果である、という考え方を維持し続けた。したがって、生物形態の系統発生論は、同時に精神の系統発生論なのである。」





ほんとうの力をください  
力に使われなくてもいいように

ほんとうの言葉をください  
言葉に使われなくてもいいように

ほんとうの智慧をください  
知識に使われなくてもいいように

ほんとうの愛をください  
愛を探さなくてもいいように

ほんとうの私をください  
私を探さなくてもいいように

■ポーラ・アンダーウッド『一万年の旅路／ネイティブ・アメリカンの口承史』（翔泳社 1998.5）

「そこで、＜平和の道＞を守る者たちは見てとった。一族がいよいよ諍い好きになってきたこと。だんだんと争いの多くが知恵ではなく腕力で解決されるようになってきたこと。一族全体の前に長く暗い道が続いていることを――。／彼らはこれについて考え抜き、互いに相談し合っては、＜戦の道＞を歩む者たちがなぜ聞く耳をもたないかを解き明かしていった。最後にだれかが、それまでとはちがう道を提案した。／「どうだろう」／彼は口を開いた。／「＜平和の道＞にふさわしい性質の若者を選ぶだけでなく、これからは」／彼は続ける。／「＜戦の道＞に向いているけれども、同時に平和の大切さを学ぶ力のある若者も選ぶことにしては。どうだろう」／彼は次のように言葉を結んだ。／「そういう若者にも、いまわれらが＜平和の道＞を歩むことを選んだ若者たちにしているように、想いや理解について教え、一族の長い旅についての物語を伝えては。そのうえで彼らが戦を学ぶ年になったら、それも学ばせようではないか。彼らが両手にそれぞれの道に乗せて、二つの釣り合いをとることができるように――」

「このため、＜守り手＞たちの性質そのものも変わりはじめた。逞しさはそれまでもずっと重んじられていたが、こんどは＜戦の道＞を歩む者たちが競技で使うような技とも組み合わせられることになったのだ。／「どうかしら」だれかが言った。／「私も目や手や力を試す競技を考え出しては。なおかつ、それがたやすく戦に結びつきかねないことを心にとどめておきましょう」／そして、彼女の提案はこのとおり実行された。それまで試すのは思慮深さだけだったが、新しく強さと忍耐力も加わって、＜平和の守り手＞も戦向きの者たちに負けず劣らず強く、堂々たる押し出しをそなえるようになった。早くから思慮と同胞意識を養ったうえで＜戦の道＞に踏み出し、あらゆる人びとの尊敬を得る者たちがふえていった。＜平和の道の守り手＞たちも彼らへの励ましを惜しまなかった。／「さあ行って、われらのために学んでくるがいい」／彼らはこんなはなむけの言葉を送った。／「戦の道とそのわけについて。もしかしたら、それが理解できれば平和と統一をめざすより良い道が見つかるかもしれぬ」

# mediopos-159

2015.4.23



## ■ K. デイヴィッド・ハリソン 『滅びゆく言語を話す最後の人々』(原書房 2013.4)

「グローバル化のマイナス面は、勢力の強い言語が、少数言語とそこに含まれる知恵とを押し潰すときに生じる。これに向かわせる原因として最も多いのが国の教育システムだ。リマやメキシコシティやモスクワで決められたカリキュラムがその地域すべての学校に押しつけられ、教科書に載っている受け身の知識だけが正当とされ、それ以外の認識法はすべて排除されてしまう。一方グローバル化におけるプラス面は、世界じゅうの少数言語共同体が交流しアイディアの交換が可能になった点である。オレゴンのサイレツ族はハワイやニュージーランドに行き、言語再生の成功例を見せてもらうこともできる。インドのホー族は、彼らの摩訶不思議なアルファベットがユニコードとして認められるよう誓願を出すことができるし、アメリカで提供されているホーの音声辞書にアクセスすることもできる。これらの共同体は現代技術を賢く使っている。また、それによって、闘っているのは自分たちだけではないこともわかるのだ。」

「言語において地域性の力が非常に強く働くのは明らかで、だとすればおそらく、グローバル化を危ぶむ必要などないのだろう。この先も英語は広がりつづけ、同時に中国語やアラビア語も拡大して、三カ国語の世界になるかもしれない。だがその英語、中国語、アラビア語は、それぞれ地域の影響を受けて何百種類もの言語に枝分かれし、ニュースキャスターの言葉や文字だけが、どの方言の話者も理解できる唯一の接点になるかもしれない。私たちは新しく、そして表面的な言語多様性を持つ世界に暮らすことになるが、一方でそれ以外の6997言語は消滅し、深い知恵の体系も失われてしまう。／言語再生という形でグローバス化を押し返す働きは、これからの数十年において最も興味深い社会潮流として見守るべきひとつとなるだろう。その結果は人類の知的能力に、また人類の叡智にとって重大な意味を持つはずだ。(・・・) 彼らの知っていることー私たちが忘れてしまった、あるいは知りもしなかったことーそれがいつの日か私たちを救うかもしれない。このメッセージに7000もの言葉で繰り返されるメッセージに、私たちは耳を傾けるべきなのだ。しっかりとその言語を聞こう、その声はまだ聞けるうちに。」

バベルの塔の話がある

かつてすべての人はおなじ言葉と話していた

そして天にも届くほどの塔を築こうとした

そこで神は人々が相手の言葉がわからなくなるように

たくさん言葉が生まれ人々は混乱した

ひとつの言葉しか話せなくても

伝えることのできることはわずかだ

誤解もたくさん生まれる

けれどひとつの言葉しかなければ

伝わらないことにさえ気づけないかもしれない

言葉が違えば

違うということに気づかないわけにはいかない

ほんのひとつのことしか伝わらないとしても

なんとか伝えようとする

そして伝わる喜びを得ることができる

7000の言葉

それぞれの言葉話す人々

言葉と言葉の違いに戸惑う人々もいるだろうが

言葉と言葉の違いを超えようとする人々

言葉と言葉の違いから学ぼうとする人々もいる

神は何を望んでいるのだろうか

すべての人が相手の言葉を理解できるように

すべての人におなじ言葉と話させようとしているのだろうか

ひとつの言葉だけを正しいとし

ひとつの理解だけを正しいとして

# mediopos-160

2015.4.24



## ■ジョーゼフ・キャンベル+ビル・モイヤーズ『神話の力』(早川書房 1992.7)

「モイヤーズ 私は先生のご本—例えば『神の仮面』や『千の顔を持つ英雄』—を読むことで、神話は人間が共通に持っているものを明らかにしてくれるという事実を理解するようになりました。神話は、われわれがどんな時代にあっても、真理を、意味を、重要な価値としを探し求めている、その物語です。みんなが、われわれの物語を語り、またそれを理解しなくてはなりません。われわれはみな死というものを理解し、死に対処しなければなりません。そしてだれもが、誕生からおとなへの、それからまた死への過程において助けを必要としています。みんな、生命の意義を知り、永遠なる存在に触れ、神秘的なものを理解し、自分が何者であるかを発見する必要があります。／キャンベル 人々はよく、われわれみんなが探し求めているのは生きることの意味だ、と言いますね。でも、ほんとうに求めているのはそれではないでしょう。人間がほんとうに求めているのは、<いま生きているという経験>だと私は思います。純粹に物理的な次元における生命経験が自己の最も内面的な存在ないし実体に共鳴をもたらすことによって、生きている無常の喜びを実感する。それを求めているのです。結局そこがいちばん肝心なところです。私たち自身のうちにそういう喜びを見出す助けとしてこれらのかぎがあるのです。／モイヤーズ 神話はなにかを解くかぎだといっしょる？／キャンベル 神話は、人間生活の精神的な可能性を探るかぎです。／モイヤーズ 自己の内面において知ったり、経験したりできることか？／キャンベル そうです。／モイヤーズ 先生は神話の定義を意味の探求から意味の経験にお変えになったわけですね。／キャンベル 生きているという経験です。意味は知性に関わるものです。(…) 私たちは外にある目的を達成するためにあれこれやることに慣れすぎているものだから、内面的な価値を忘れていたのです。<いま生きている>という実感と結びついた無常の喜びを忘れていた。それこそ人生で最も大切なものなのに。」

生きているか

いまここに生きているか

生きることを求めすぎて

いまここに生きていることを忘れていないか

ぶら下げられたニンジンを追いかけて

自分がどこにいるか忘れてはいないか

生まれ育ち老いて死んでゆく

そのなかで何かを忘れてしまっていないか

いまかけがえのない自分がここにいること

そこに永遠が宿っていることを忘れてはいないか

# mediopos-161

2015.4.25



■河合隼雄・中沢新一『「あいまい」の知』（岩波書店 2003.3）

（河合隼雄「曖昧さと「私」より）「私は、心理療法家 psychotherapist として仕事をしているわけです。そのときに思いますのは、私のやっていることは少なくとも近代科学とはまったく違うことをしている。なぜかという、近代科学というのは研究者と対象は完全に切断されているからこれは operate したり manipulate したりできるわけですね。ところが私は相談に来られた人と完全に関係をもっている。しかもその関係を非常に大事にしている。それは先ほどの雅楽の伝達にマン・ツー・マンの形を大事にしているのと似たところがあると思いますが、人から人へというのをすごく大事にしている。実際は心理療法家にも種類がありまして、心理療法家を自然科学的にやっていて、自分は患者を operate したり manipulate したりして治していくことができると考えている人がいます。アメリカに非常に多いと思います。しかし私はそれとまったく違っていて、来られた人に対して operate することも manipulate することもできないと思っています。なぜかというわれわれは関係の中に生きている。関係の中に生きているということと、対象の多義性ということをもむろろずっと保存しておきたいと思っています。／それを一般の人は、私の前にいる人をたとえば非行少年であるとか殺人犯人であるとかヒステリーの患者であるとか一義的に定義するわけですね。ところが私は一義的定義を取りはらって、「この人は多義的で、何になるかもわからない」と思っている。」

「私と私の前に座っている人との境界は、普通は「I and You」というのは離れているわけですが、この境界が非常に曖昧になってきます。時には来られた人の症状がこちらに移るということもあります。ものの言い方で移るときもあります。それくらい一体になっているけれども、一つではない、やっぱり違うわけですね。そういうことをやりながら、あるいは私の生き方を考えますと、この「I」というもの、「私」というものは、いったい、どんなふう生きてきいるのかとか、どの程度の曖昧さをもっているのか、ということが問題になっていきます。」

あいまいみー  
わたしはだあれ

あいまいなわたしが  
あいまいなあなたにであう

わたしはだあれ  
あなたはだあれ

わたしにとってのあなた  
あなたにとってのわたし

わたしとあなたのさかいが  
あいまいになってゆく

そのあいまいのなかから  
わたしとあなたがあらわれる

あいまいなわたしから  
かけがえのないわたしがあらわれる

あいまいなあなたから  
かけがえのないあなたがあらわれる

# mediopos-162

2015.4.26



■武満徹・川田順造『音・ことば・人間』(岩波書店 同時代ライブラリー 1992.11)

(武満徹)「もの(存在)にたいして(人間が)共通の、あるいは異った感情をもつということはどういうことなのでしょう。ル・クレジオは、<神>は巨大な樹のようであると言ひ、私は屹立する一本の樹に宗教的な感情を抱く。それはたぶん生物としての人類の記憶というようなことと関わりをもつものでしょう。いずれにせよそうしたものは習慣や好みに支配され、時間によって培われるものであろうと思います。／樹を見るように、樹に感ずるように、(私は)音とも触れたいと思います。樹は、「それこそ存在について十分に語るものである」からです。音は単に抽象的な物理的波長ではありません。音は、その高低や強さ長さで表される座標に示すことが可能であるようなものではない。やはり「誰にも迷惑をかけず、他のものから何も奪いもせず空に向かって枝を伸ばして」地に立ち、樹のようにそれぞれ固有性をもっているものです。(私にとって)音は、道具ではありません。と言うより、道具にはできないものでしょうー。」

音が道具になるとき  
その生命は失われてしまう

言葉が道具になるとき  
そのポエジーは失われてしまう

人間が道具になるとき  
その永遠は失われてしまう

失われたものを取り戻すために  
私はただじっと耳をすませていよう

ひととの樹がその見えない枝葉を伸ばし  
私を包み育ててくれるのを感じていよう

そして時間の奥に広がる  
限りない宇宙を飛翔するのだ

# mediopos-163

2015.4.27



知らないことを知ることから  
すべてははじまる

知っていると思うことで  
知っていることは命を失うから

はじめて見るように見る  
はじめて聴くように聴く

あなたに会うのも  
いつもはじめて

知らないあなたは  
いつも新しい

## ■原研哉『白』（中央公論新社 2008.5）

「ある対象について深く考えることによって、その対象がまるで初めて見るかのような新鮮さを取り戻すことがある。書き慣れた文字も、反復して書くうちに、不思議な造形物のように感じられてくることもある。(…) / 僕は「花」について多くの経験をしすぎているがゆえに、花のリアリティが分からなくなっている。しかしたとえば、一枚の写真が、花は明らかに生殖器である事実を目の前に示すことで、僕は自分たちの目についてウロコを落とすことができる。多くの才能ある写真家が競って花の写真を撮るのは、花が美しいからではない。人の心を動かしてやまないその対象物を、未だかつて誰もか捉え得なかったイメージとして捉え直すことに惹かれてやまないからである。(…) / 未知化とはそういう現象である。既知化し惰性化した知識を、根源の方に戻して感じ直してみることで、僕は新鮮なものごとを認識し直すことができる。「分かる」とは元来、そういうことだったのではないだろうか。さらに言えば、そのような「未知化」を意図的に行い、「分かる」を成就させることの中に表現の本質があるのではないかと思うのである。 / 未知化は白に通じている。白とは渾沌に向かう力に逆行し、突出してくるイメージの特異点である。そでは既知の混濁から身をよじり、鮮度のある情報の形としてくっきりと僕らの意識の中に立ち上がる。白とは、汚れのない認識である。いとろしき様相の具現、情報の屹立した様を言う。いとろしき様相はいとろしき認識を呼び起こす。「分かる」とは「いとろしき認識」そのものではないか。既知化し、惰性化することは、意識の屹立がおさえられ認識の泥沼に沈むことである。その泥沼から、まっさらの白い紙のような意識を取り出してくることが「分かる」ということである。 / 僕は世界に対しては永久に無知である。そしてそれでいいのだ。世界のリアリティに無限におのき続けられる感受性を創造性と呼ぶのだから。」



■新山喜嗣『ソシアの錯覚／可能世界と他者』（春秋社 2011.8）

「ソシアの錯覚」とは、自分のもっとも身近にいる他者が、ある日突然に顔だちがそっくりのにせものに入れ替わったと感じる体験をさします。この入れ替わったという感覚は絶対的であり、顔だちがそっくりであるばかりでなく、たとえしぐさや性格から始まるあらゆる特徴が以前と全く変わりがなくとも、「ソシアの錯覚」ではやはり相手が本物ではない別人であると感じてしまいます。」

「われわれの周りには同一と非同一の両方に関して宙ぶらりんの個体が、常時いくつもぶら下がっているのである。それは、いかにも奇妙な景色に違いない。われわれは、日々それらの個体の多くに対して「同一」という称号を与え、そして、おそらくもっとも少ない個体に対しては「非同一」の称号を与えながら生活をしている。しかし、これらの称号の授与式にあたっては、授ける方も授かる方も、式の参加者としての正当な資格がないことは言うまでもない。／われわれの眼前にある宙ぶらりんの存在は、ひょっとするとわれわれをソシアの錯覚へといざなうのかもしれない。たしかに、ソシアの錯覚はわれわれ全てに発祥するものではない。しかし、先にも述べたように、患者が発して言葉は、患者が意図した通りのままでわれわれに伝達されてしまう。その時には、ソシアの錯覚の訴えの中に潜む個体、同一性、人物といったものに関わる患者の形而上学的な直観の振動に、われわれの直観もおそらく共振しているのだろう。ソシアの錯覚は、われわれの日常の中に潜む形而上学的な真理を糧として、今日も発症の機械を妖しく窺っているかのようである。あたかも、この宙ぶらりんを恨むかのよう。」

あなたはどこへ行ってしまった  
わたしの知っているあなた

あなたはあなただけ  
あなたはいつたいだれ

あなたがあなたであること  
そのなかに潜むあなたでないあなた

わたしはどこへ行ってしまった  
わたしの知っているわたし

わたしはわたしだけ  
わたしはいつたいだれ

わたしがわたしであること  
そのなかに潜むわたしでないわたし

# mediopos-165

2015.4.29



内に向かって見る目は  
外に向かって開かれる

外に向かって見る目は  
内に向かって開かれる

閉じることは開くこと  
開くことは閉じること

生は開かれているのだ  
開かれて死へと繋がる

死は開かれているのだ  
開かれて生へと繋がる

私は開かれているのだ  
開かれて他者へ向かう

■片山恭一『どこへ向かって死ぬか／森有正と生まるまどう私たち』(NHK 出版 2010.9)

「私たちが準拠すべきものは、森有正が言うところの「経験」だと思います。死を実存的にすべての終わりと考えることは、すでに何者かの恣意に属しています。それは自己の所有と支配に結びついた、個人化された死のイメージに過ぎません。つまり直線的で不可逆的な生という、たかだかこの数百年のあいだに支配的となった観念のなかで考えられた死でしかないのです。そもそも生を有限なものと考えことからして、自己中心的な見地からの一方的な限定を意味しています。私たちの「自由」の礎である死を、近代という時間と、西欧という空間に限定された、ローカルな恣意にゆだねてはならないと思います。／森は「人間」や「自己」からはじめることを繰り返し戒めていました。彼によれば、人間とは「自己の中に無限の虚無の可能性を含む」存在です。この虚無が外部に投影されたものが、おそらく自己にとっての死なのです。つまり自己を自己として完結させようとするのが、死をすべての終わりとしてアレンジし、そのような死によって、自己は自らを限定してしまう。この共犯的な相互限定の構造こそ、「自己の中に無限に虚無の可能性を含む」という言い方で、森が直観していたものだったように思います。／だが果たして、自己は自己として完結するものなのでしょうか。完結しないから、私たちは「他者」という観念をもつのではないのでしょうか。そして「他者」の観念が到来することを、森は「促し」と呼んでいるように思います。自己が生を所有し、支配するのではない。そうではなく、私たちの自己が生に帰属しているのであり、私たちの自己が、生きることによって規定されてくるのである。森が「経験」という概念をとおして、いちばん訴えたかったのは、そのことではなかったでしょうか。(…)/このことは、私たちが主体的に生きながら、けっして主体ではないことを意味しています。主体ではない生を主体的に生きることの中に、予見も説明も不可能な、私たちの生のミステリアスな部分があるのです。このミステリアスな回路を通して、私たちの生は常に自己の外に向かって開かれています。それゆえ自己の終わりである死は、「出発」のニュアンスを帯びてこざるをえないのだと思います。」



# mediopos-166

2015.4.30



■ 『ジョルジョ・モランディ』(予定されていた展覧会の展覧会カタログ/フォイル 2011.11)・  
岡田温司『ジョルジョ・モランディ/人と芸術』(平凡社新書 2011.3)

(岡田温司)「たえず前を向いて突き進んできた20世紀の芸術にあって、モランディのそれは、たしかにきわめて例外的で特異なものである。この画家は、クレーの天使のように、後ろを向きながら、進歩の風によって前に押し出されていく。進歩とは、どこかもの悲しいものだ。モランディは、はっきりとそのことを自覚している。過去を振り切ることはできないのだが、かといって前に進まないわけにもいれない。後ろ向きで前進すること、しかもゆっくりと少しずつ、反復と逡巡を厭うことなく。なぜなら、「反復—これこそが現実であり、生存の厳粛な事実」(セーレン・キルケゴール)だからであり、「反復、それは、何かが変わえられること」(ジル・ドゥルーズ)にほかならないからである。」

偽りの新しさに  
欺かれてはならない

すべては常に変化する  
すべては常に新しい

けれどそれには  
限りない逡巡と反復が必要となる

白は白に白を重ね  
はじめて白が生まれるように

形は形に形を重ね  
はじめて形が生まれるように

生は生に生を重ね  
はじめて前に進むことができるのだ

# mediopos-167

2015.5.1



■谷川俊太郎『詩に就いて』（思潮社 2015.4）

「大きな物語の中に小さな物語が／入れ子になっているこの世／その隙間に詩は忍び込む／日常の些事に紛れて」

「日本語の詩という語には、言葉になった詩作品（ポエム）と、言葉になっていない詩情（ポエジー）という二つの意味があって、それを混同して使われることが多い。それが便利なこともあるが、混乱を生むこともある。（・・・）詩も人間の活動である以上、詩以外のもろもろと無関係ではいられない。詩を生き生きさせるのは、言葉そのものであるとともに、無限の細部に恵まれたそのもろもろなのではないだろうか。」

生きるためには  
物語が必要だ

ときに大きな物語  
ときに小さな物語

日常を生きるには  
たくさんの小さな物語

人生なるものを生きるには  
ほんのひとにぎりの大きな物語

どちらの物語も  
生きるための食べ物になる

栄養にもなるけれど  
毒になることもある

そしてそれらの物語は  
詩を生んだりもする

役に立ちそうもないけれど  
いのちを輝かせたりすることだってある

それと気づかれないところで  
隠し味のように



わたしという星座と  
 あなたという星座が  
 偶然に出会う奇跡に  
 わたしのなかの星と  
 あなたのなかの星は  
 むすばれ戯れ交感し  
 新たな星座が生まれ  
 そのかたちは息づき  
 また新たな出会いへ

■向井周太郎『デザイン学/思索のコンステレーション』（武蔵野美術大学出版局 2009.9）  
 「おそらく コンステレーション 以外には なにひとつ生起しえないであろう（マラルメ）  
 ／（・・・）このコンステレーションという語は、ラテン語の「con（共同・連関）と stella（星）  
 の結合」から成る「cinstellatio」に由来し、星の群、星々の連関という意味から「星座」を  
 表し、とくに十六世紀初頭以降、天文学や占星術の用語として用いられてきました。しかし、  
 十八世紀以降は、「ある状態の偶然の出会いや多様な要因の集まりやある事態の同時発生な  
 どから生ずる新たな配置・形勢・局面・情況などへの転換」という意味へと広がって、しか  
 もその意味が支配的なものになった、としています。／その意味の広がりには「星々」の現象  
 を介して星の起源、宇宙生成の根源的なイメージへと遡及しているように思われます。私が  
 マラルメのコンステレーションから喚起させられた分節的な意味の情景は、すべてこの語の  
 根源的なイメージへの遡及のなかにすでに包括されているのではないかと思います。／こ  
 のコンステレーションの分節的な意味の情景には、近代技術文明を達成した西洋形而上学な  
 いし哲学の物質的自然観を大きく転換・脱構築するための自省的思惟の問題群がすでに多岐  
 にわたって表象されています。その主な観点を取り出してみるならば、ひとつは、存在概念  
 の転換です。つまり「存在から生成へ」、「ある」から「なる」への転換であり、存在（する）  
 者のすべてを固定的な（死せる）物質、世界を作る単なる「材料」として見るのではなくて、  
 生きて生成するもの、生きた自然として捉え返すことへの転換です。（・・・）／また、ひ  
 とつは、必然的な因果関係の普遍性を前提とする西洋近代科学の対象からは排除されてきた  
 「偶然性」やその「出会い・遭遇・邂逅」の問題です。」

# mediopos-169

2015.5.3



季節のなかで  
聴こえない音を聴き  
聴こえない楽を奏で  
見えない姿を見  
見えない舞を踊り  
自然とひびきあう《花》

時のなかで  
聴こえない音を聴き  
聴こえない楽を奏で  
見えない姿を見  
見えない舞を踊り  
永遠とひびきあう《花》

## ■北沢方邦『歳時記のコスモロジー』（平凡社 1995.3）

「タケノコやカツヲを食べる季節には、かつて山野にはホトトギスの声がみちていましたし、クリやムカゴの季節にはモズの高鳴きやシカの声、草むらの虫の音の交響曲が聴こえていました。そして人間のつくりだす音楽は、それら自然の声を直接は聴こえない言外の音としてあいひびかせながら、より高度に抽象的な宇宙論として展開したもののなのです。十三世紀に書かれたもっとも古い雅楽の伝書『教訓抄』で、狛近真（こまのちかざね）が述べていますね。楽人にとってもっとも重要な能力は時の声を聴くことだ。虫の音やシカの声といった季節の声だけではない。夜更に杯を交わしていた客人に、「いま何時ぞ」ときかれた高名な楽人は、床柱を叩いてその音を聴き、「いま子の刻ぞ」とこたえた。その日の湿度によっても異なってくるのですが、夜半に気温が下がるにしたがって柱の発する音がちがうというのですね。（…）／いまの環境は人工騒音にみちみちているし、音の調律の基本は機械的な平均律だし、耳も悪くなるはずですが。それはともかく、時の声を聴く能力をもった楽人のみが、みずからがつくりだす楽の音を通じて、靈妙な均衡や交感としてのそのときどきの宇宙のハーモニーと、そこに流れる《死と生成》の弁証法という法を、ひとつひとつに伝達できるというのです。大自然と人間の音楽、楽人と聴衆、すべてがそのようにひびきあう一瞬、それがまた世阿弥のいう《花》でもあるのです。」

# mediopos-170

2015.5.4



■平田オリザ『演劇のことば』（岩波書店 2004.11）

「政治からも、特定の思想からも、そして『少年ジャンプ』からも自由になって、それでは私たちは何を伝えるのだろう。／私はよく、芝居の上演のあとのアフタートークで、観客から、／「この作品のなかで、平田さんが一番伝えたかったことは何ですか？」／という質問を受ける。私は、／「ありません」／と即答する。しかし、こちらも客商売だから、それだけでは申し訳ないので、／「伝えたいことは何もない、表現したいことは山ほどある」／と続けて答える。私は、やむにやまれぬ衝動から、表現をしたいと思う。私に見えている、私の脳が知覚している世界を忠実に舞台上に再現したいと思う。私の舞台がリアルだとすれば、それは私の脳にとってのリアルであって、それ以外の何ものでもない。」

自由のために

歌は歌でしか表せないものを歌う

詩は詩でしか表せないものを詠う

演劇は演劇でしか表せないものを演じる

歌が政治を目的とするとき歌は失われる

詩が思想を目的とするとき詩は失われる

演劇が教育を目的とするとき演劇は失われる

自由のために

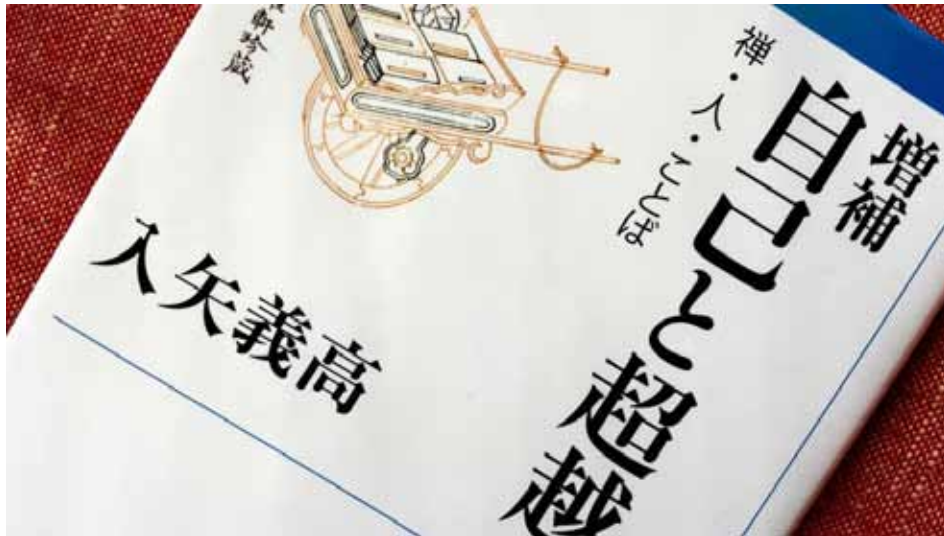
やむにやまれぬ自由のために

歌よ 詩よ 演劇よ

誇り高くあれ！

mediopos-171

2015.5.5



■入矢義高『増補 自己と超越／禅・人・ことば』(岩波現代文庫 2012.2)

「禅といえば、なんでもかんでも断滅せよ、滅却せよ、泯絶せよ、遮遣せよ、放下せよ、といったように、要するに否定一点ばりの教えであるかのように受け取られ勝ちな傾向が、(…)かなり古くから顕在化していた。右に挙げた六祖の言葉(百物思わずして、常をことごとく除却すること莫れ／百物思わずして、常に念をして絶たしむること莫れ。即ち是れ法縛にして、即ち辺見と名づく)も、すでにその当時からそうした風潮があたりからこそ、あのような注意となったのである。彼はそうした否定一辺倒の図式を、(…)「法縛」とし、「辺見」として批判している。「法縛」とは、また「法執」ともいい、また「理障」ともいう――その理法がどれほど玄妙崇高なものであっても。」

みずからを超えようとして  
みずからを捨ててはならない

否定のための否定は  
みずからを否定してしまう

否定されなければならないのは  
みずからがつくりあげた偶像の壁なのだ

どんな権威もみずからを縛る  
縛られることでみずからを肯定してはならない

否定は肯定へと向かう自由のために  
みずからの縛りを解く喝！であれ

# mediopos-172

2015.5.6



■倉本四郎『妖怪の肖像／稲生武太夫冒険絵巻』（平凡社 2000.1）

「江戸町民のあいだで人気のあった夜の遊びに、百物語というのがあった。／一堂に会した連衆が、たそがれどきを期して百筋の灯心に火をともし、一座の中心に立てる。連衆ひとりずつ、交互に怖ろしい物語をとりかわし、物語がひとつ終わるごとに灯心をひと筋抜く。こうして、最後のひと筋が抜かれるまで語りつづけるという趣向の怪談会だった。／とくべつに青紙を張った行灯を用意した。そのうえでのことだから。話がすすむにつれて、一座の雰囲気は、だんだんに凄みをおびてくる。百も語るのだから、とうぜんながら深更におよぶ。夜が更けるにつれ、戸外の闇の気配が、ひしひしと音を立てるようにも濃くなりまぎっていきのを感じられてくる。察するに、終わりに近づき、残り少なくなった灯がひとつ消されるたびに、連衆はじぶんの魂が細るような、そろそろと何者かの手によって抜き出されているような心持ちになったのではないか。そうして丑三つ（午前三時～三時半）にいたるところあい、百筋めの灯心が抜かれ、座が暗闇に占領される。網膜にのこっていた行灯の青色もかすれて、ついに消え去るとき、今度こそ芯からふるえあがる。言い伝えでは、この瞬間、かならず怪異が出来るようになっていた。」

「この江戸の流行が、遠く中国山地の盆地にもちこまれたときから、世にも希な物語ははじまる。百物語は武士階級のあいだでも、練胆の目的でおこなわれたというのが、私たちの主人公、稲生平太郎＝武太夫は、これを隣の平田家の使用人・権八とふたりでこころみたあげく、怪異に巻き込まれるのである。」

求めよ

さらば与えられん

されど

求めることの難きかな

闇を求める

心の不思議

闇を求めて光を探すか

怪異を求めて奇跡を探すか

闇は闇を呼び

怪異は怪異を呼ぶばかり

# mediopos-173

2015.5.7



■荒俣宏『別世界通信』（ちくま文庫 1987.12）

「月が人びとの想像力を掻きたてなくなってから、もうどれほどの歳月が流れたろう？ 別世界としてのイメージを独占したかに見えた月が、そのイメージ・メーカーたる機能を失ってから、人間はいったいもうひとつの世界をどこに求めてきたのだろうか？／現代科学技術の散文的な威力が月を地球の延長につなぎ止め、もともとは遙けきものであったはずの太陰を「既知の土地（テラ・コグニタ）」に変えてしまったとき、わたしたち現代人は象徴としての「月」を失ったと言っていい。別世界の憧憬を表現しようとする芸術家たちも、おそらくは詩と真実をめぐる争いのさなかに科学に屈したために、もう月を描こうとはしなくなった。なるほど、わたしたちはすでに「月の喪失」を鋭く告発した一人の驚くべき文学者を知っている。かれ、D・H・ロレンスは鉱物的な冷たさを潜ませた晩年の作『黙示録』のなかで、月と星と太陽を失った現代人の不幸をこんなふうに指摘する――／「われらと宇宙はひとつだ。宇宙とは一個の巨大な生きものであり、われらはその一部なのだ。太陽こそ宇宙の心臓であり、その鼓動はわれらの最も小さな血管にまで血を送りこむ。月は偉大な輝かしい中枢神経であり、われらはそこから世界を感じとる。土星や金星が、われらにどんな力をおよぼしているかは、だれも知らない。しかし星は、いつの時代にもわれらの内にひそかに脈搏する力でありつづけた」／しかし、現代に生きるわたしたちが「月の喪失」を哀しむのは、ロレンスが主張するような「人間の伴となる世界」あるいは拡大された自分自身としての月ではなく、別世界としての月を失ったからだ。わたしたちは、地球という現実の生活空間から足を離して、純粹に物質的な想像力を巡らそうとするとき、別世界を必要とする。(…)  
月の意識が夢に満ちた眠りのそれに似ていると表現したルドルフ・シュタイナーは、この場合に鋭い暗喩となって胸を衝く。なぜなら月は、＜宇宙の記憶＞を解放する夢と同じように、わたしたちが別世界に暮らしていた時代の記憶を思い出させる標識（コード）だったからだ。」

私たちが地上に縛りつけられて久しい  
今では宇宙の彼方さえ地上の延長でしかない

想像力の翼はすっかり退化してしまった  
別世界を同時に生きることのできる翼

私たちはほんらい多次元に住む者  
その翼は宇宙の記憶を飛翔させる翼なのだ

別世界で悪い夢を見ることもあるだろう  
地上を生きることが悪い夢でもあるように

けれど胡桃の殻のなかに閉じ込められたとしても  
同時に無限の天地の主であることもできる

多次元世界に生きる者よ  
忘れられた想像力の翼を広げよ

そのとき地上は地上を超え  
新たな姿を顕すであらう



# mediopos-174

2015.5.8



■武久源造『新しい人は新しい音楽をする』（アルク出版企画 2002.4）  
（対話／河合隼雄＋武久源造：体の音楽、心の音楽、魂の音楽 より）

「武久 外国に行ったりして、音楽の話でコミュニケーションしなきゃいけない時、僕らが日本語で「心」と言っているようなものを、英語やドイツ語で何とか表現してみようと思うわけですけど、なかなか上手くいかない。それで、僕は三つに分けてみてね、音楽にはどうも「体の音楽」と「心の音楽」と「魂の音楽」があるんじゃないか。そう分けると比較的上手くいくんです。僕の定義は単純で、体というのは言語以前の次元、心というのは言葉の次元、そして、魂というのは言葉以後というか、言葉以上だから言葉にならない次元なんです。／河合 面白い分類ですねえ。／武久 「体の音楽」とうのは、動物的次元も含めて、人間であれば、つまり二本足で歩いている人だったら、誰にでも共感できる音楽です。リズムにのるとか、体を動かしたくなるとか。身体を持っていさえすれば、だいたい分かってくれるんじゃないか、という次元ですね。これは音楽教育の中で重要な部分だし、子どもたちにも通じやすい部分ですよ。（・・・）／河合 なるほど、なるほど。／武久 次にもうちょっと音楽が、いわゆる芸術的になってくると、何かを表現するとうことになります。意味を持つという次元ですね。こうなると言葉が介在してきます。これが僕の言う「心の音楽」です。心で思うことは一応言葉で言える。しかし、言葉というのは、僕らは分かっているようで全然分かっていないとも言えます。例えば、「太陽」というのは日本人にとっては赤い物だけど、欧米の人にとっては黄色です。要するに「太陽＝sun」というふうには短絡できない。（・・・）太陽ですらそうなん

ですから、僕ら日本人がバッハを演奏する時に、ドイツ人がドイツ語で考えているバッハの音楽を、我々が完璧に分かっているとは思えない。（・・・）ところが、ある若いアメリカ人の演奏を聴いて、そういうことが吹っ飛んでしまったんです。彼の演奏だって、やっぱり依然として英語のなんだけども、それでいて「これは本当にバッハの音楽の側まで行っているな」と真に思えるものだったんです。その時に、音楽にはどうやら言葉を越えた次元があるなど、実感として思えた。音楽は言葉の違いを超えることができる。言葉が分かり合えなくても直接理解し合える次元がある。つまり、頭を越えて天にまで行ったら一つになっているのかもしれない、という希望を持った時に、僕はちょっと自身を取り戻したような経験をしました。僕はこれが「魂の音楽」の次元だと思っていて、この段階で初めて音楽には国境がないと言えるんですけど、いきなりここには行けないんですね。というより、行くべきじゃないんです。／もう一つ重要なことは、三つの次元が音楽にはあるといっても、音楽が三種類あるわけじゃないということです。一度の音楽行為の中に、今申しました三つの要素が全部あるわけです。つまり、三位一体ですね。」

なぜ体があるんだろう

言葉がなくても

伝えあえるようにさ

なぜ心があるんだろう

体を超えて

言葉で伝えあえるようにさ

なぜ魂があるんだろう

言葉を超えて

直接伝えあえるようにさ

魂が光を受けるために

体は足を踏みならし

心は言葉を紡ぎ出す

# mediopos-175

2015.5.9



■細川俊夫『魂のランドスケープ』（岩波書店 1997.10）

「私は音楽のなかに、ひとつの「声」が聴こえてくることを待っている。／「声」といっても、人間の肉声のことではない。器楽やオーケストラ、そして人間の肉声を使った音楽を聴いても、もうひとつの「声」を聴きたいと願っている。もうひとつの「声」とは、日常にどこにでもころがっている素材としての「声」のことではなくて、そういう音素材を通して、その聴覚の向こう側に響いている「声」のことである。／存在しているものの奥に流れているだろう声。存在の深い闇の彼方から響いてくる光の予感。その聴こえてこない音楽は、たとえそれがどんなきれいな音を持っていたり、華麗な技術に覆われてうたとしても、私は退屈してしまう。／（・・・）また私は、音楽だけではなく、文学や美術にもそういった「声」を求めているらしい。優れた文学を読んでいると、その作品の背後からもうひとつの「声」が聴こえてくることがある。それは言葉が犇めく言語空間のなかから垂直的に立ち上がってくるもので、私には「声」としか名づけあつれないような流動的で音楽的な、ある状態なのである。／さらに優れた絵画を見ていると、私にはその作品の全体から生まれてくる「声」を感じる。／（・・・）私が自分の音楽に求めているのも、日常では自分の内側から出てこない「声」の響きなのだ。それは私の日常の感情表現の「声」ではない。（・・・）それはこの宇宙に一人で向き合っているような感情である。それは祈りの感情といってもいいかもしれない。そういった時間空間に響いてくる「声」を私は聴きたいのである。」

私は待っている

その声の訪れを

それは内なる光の言葉か

うつろいの背後から

祈りのように響いてくる

見えない樹が

私のなかで立ちあがる

虚空に蒔かれた種子が

芽を出し葉を茂らせ

ひともとの樹となってゆく

そして樹は歌う

私は待っている

その声の訪れを